

大学の Lauriston Sharp を初めとする12人の学者がこれに参加した。本書(タイプ印刷)はその予備報告書である。まえがきで「予備」(preliminary)という言葉が強調されていることから分るように、内容はきわめて簡素で、概説的である。わずか79ページの本文に、前半で、調査地の地理、人口、行政、治安、経済、移住問題、保健、教育、種族関係などの多方面にわたる調査資料をすべて要約し、後半でそれぞれについて勧告ないし対策を述べているのであるから、けだしそれは当然である。それにしても、きわめて平易な英語で手際よくまとめられており、調査報告書を出すには一つの参考になるであろう。

調査地域は、南と東が Mae Kok River に接し、北と西がラオスとビルマの国境に囲まれた Chiengrai Province の一地方、つまり Mae Kok Region である。そこには、Thai, Shan, Yunan Chinese, Karen, Lissu, Yao, Lahn および Akha の8種族が住んでおり、本書では後の5つが部族(tribes)として扱われている。部族たちはほとんどが高地(uplands)に住んで dry agriculture (水稲と陸稲の両方を栽培する Karen 族を除けば、すべての部族が陸稲と家畜用のとうもろこし、その他を栽培している)を営み、灌漑稲作の行なわれる平地(lowlands)の住民(主にタイ人)の生活からは遊離している。しかし、生活様式の面においても、また生産技術(稲作)の面においても、lowlands の影響は大きく、言葉も北部タイ語が次第に uplands の共通語になりつつあり、uplands と lowlands の融合にはもはや2世代は要しないであろうと言われる。とは言え、部族はラオスやビルマの国境を越えて往来するものが多く、この地方はタイ政府の決定のみならず、間接的にはラオスやビルマ、さらには中国政府の決定の影響を受けて、政治的には international な、複雑な様相を呈している。

いわゆる「地域研究」としてさまざまな側面から検討された山地部族の生活、および彼らの平地住民に対する相互関係は、簡略ながらも一応興味深く読むことができるが、後半に示される勧告ないし対策には思いつき程度のもものが多く、深く掘り下げた重みのある調査報告を期待する向きには失望を買うであろう。ただし、予備報告にそこまで要求する方が無理かもしれない。なお、付録には、北部タイ住民の服飾や手工芸を扱った Ruth B. Sharp の "Tribal Arts and Crafts

in Northern Thailand" (18ページ)が載せてあり、論文としてはむしろこの方がまとまっている。(高木英明)

Theodore Stern: *A Provisional Sketch of Sizang (Siyin) Chin*, Asia Major, n.s. vol. X part 2, 1963. pp. 222-278.

ビルマの西部、チン丘陵地帯で話されているクキ・チン諸語は、従来、比較的未開拓の研究分野であったが、最近では幾つかのすぐれた記述研究が発表されるようになった。

この論文は、著者が1954年に Eugenie J.A. Henderson, G.H. Luce 等と共同で、約6週間に亘って行なったチン丘陵の言語調査に基づいてまとめられた sizang (従来は siyin と書かれた) 方言の記述報告である。(この時の研究成果の一部は既に、G.H. Luce: Chin Hills Linguistic Tour Dec. 1954: J.B.R.S. 1959 で発表された。)

著者は全体を 1. phonology 2. Noun Expression 3. Verb Expression 4. Sentence and Clause の4章に分けて、Sizang 方言の構造をきわめて明確に分析している。

Sizang 方言が、音韻、語彙、文法等の諸点から見て Teizang, Saizang (zang はいずれも<平地>の意)、Tiddim, Ngawn 諸方言ときわめてよく似た構造をもっており、且て Sten Konow, G.A. Grierson 等によって設定された「北部方言」群の存在を再確認した意味でも、この論文の果たした役割は大きい。北部チン方言の研究としては、先に発表された E. J. A. Henderson: Note on Teizang, a Northern Chin Dialect: B. S. O. A. S. 1963 とならぶ貴重な資料だということができる。

この論文の重点は、専ら morphology におかれている。クキ・チン語の affix については、且て S.N. Wolfenden の労作があるが、複雑な affix を詳細に調べてその機能を明らかにしたこの論文は、他の北部諸方言の研究にも大きな参考となる。

一方、記述研究を目的とした論文の性格上、止むを得ないと思うが、他の諸方言との有機的関連性について全く論及されていないのは、はなはだ残念である。例えば、語末子音の交替に関して2個の stem を

設定しているが、この現象は他の方言にも並行して認められるのであるから、Semantical な比較考察が必要であろう。同様な事が母音の交替現象についても言える。

音韻論では、Sizang 方言に語頭子音としての g-, r-, 及び Consonant Cluster が、夫々ない事を指摘しているが、その変遷に関する考察は全くみられない。中部方言の r- に対しては、この方言の ʝ- が対応し、中部方言の mutae liquidae に対しては、副次音 -l- の脱落に伴う単独閉鎖子音が対応すると言う事は、比較研究によって明らかである。

過去に文字をもたなかった言語の歴史を再構成する事は、非常に困難であるが、単に言語史だけでなく系譜問題を解明する意味でも、他の方言との比較研究は望ましい。(大野徹)

八木毅：東パキスタン、チャクマ族の言語：  
愛知県立女子大学紀要 第15輯 1964. PP.51～80.

ビルマと東パキスタンの国境地帯に住む少数民族の言語については、「Linguistic Survey of India」以降にも多くの個別的な研究が発表されてきた。しかしその実態は未だ、十分に判っているとは言えない。

この論文は、1964年2月から約1カ月間に亘り、大阪大学東パキスタン総合学術調査隊の一員として、チャタゴン丘陵の少数民族の言語調査を担当した著者のチャクマ語に関する報告である。

内容は、(1)文字組織と音韻体系 (2)文法構造の2部に分れており、主として後者に重点がおかれている。文例がきわめて豊富なため、この論文を一読するだけで我々は、比較的容易にチャクマ語の構造を知る事ができる。

チャクマ語は、従来インド・アリア系言語の一つとみなされてきたが、著者は文法の活用面における幾つかの非インド語的な特徴に着目し、これがチャクマ語固有の基層ではないかという注目すべき仮説を提示した。

言語の系譜問題は、同系諸言語との比較研究による規則的な音韻対応の存在確認が前提となる。しかるに、同氏の「東パキスタン、チャクマ語の語彙」説林第12輯(愛知県立女子大学国文学研究室編)に集録されている約1800の語彙を見ると、チベット・ビルマ系言語とは全く関連性がなく、その大部分がインド系言

語との間に共通性を示している。

固有のタイ系言語を全く放棄してアッサム語を使用するようになったアホム族の例があるように、言語の系譜問題と民族のそれとが必ずしも照応しない事は、言うまでもない。従って、チャクマ族の形質人類学的な計測結果が、たとえモンゴロイド的であり非アリア的であるとしても、それとチャクマ語の系統とは別である。

しかし、一見インド語的なチャクマ語の内部に潜在している非インド語的な要素を、単なる借用語として排斥する事なく、superstratum に対する substratum ではなからうかと考えた著者の着想は、やはり注目に値する。

チャクマ語が、果して固有の言語(それがチベット・ビルマ系であったかどうかは兎も角として)を失ない、周辺の強大な文化語にとって代えられたものか、或いは、古い基層の上に新しい上層語が覆いかぶさった形の重層語 (langue à double couche) であるのかどうか、こういった問題を解明するには、やはり、チャクマ語の言語史を再構成する事が必要であろう。(大野徹)

George Mct. Kahin, Editor: *Governments and Politics of Southeast Asia*, Ithaca: Cornell University Press, 2nd edition, 1964. 796pp.

Comparative politics, as a field, is increasingly gripped by a conflict between several methodologies that scholars are using to make the subject less complex and hopefully more scientific. This volume is a compromise between two methods, the structural-functional approach which is gaining increasing popularity among political scientists in the United States, and the older institutional analysis which is still more in vogue among scholars in Japan, Europe, and India. If one does not have a serious commitment to either of the above methods, or the even newer quantitative-statistical analysis used by behavioral scientists, then this book is of great value.